

2014年の放送界概観

片野 利彦*

本稿では、2014年の放送界を概観する。

◆放送の新しい動向

還暦を越え、開始から61年目を迎えた放送界では、技術の発展を受け、新たな放送のあり方が模索され続けている。例えば、4K・8Kといった高解像度の放送様式について、総務省が2月に設置した「4K・8Kロードマップに関するフォローアップ会合」では、8Kスーパーハイビジョン放送の開始を2018年とし、2016年には、CSだけでなくBS放送においても、4Kと8Kの試験放送を行なうとの方針が示された。東京オリンピックが開催される2020年には、「オリンピック・パラリンピックの中継が4K・8Kで放送され、多くの視聴者が市販のテレビで4K・8K番組を楽しむ」といった目標が設定されている。

4K・8Kの実際の放送としては、多数の放送・通信企業などによって設立された次世代放送推進フォーラム（NexTV-F）が6月、4Kテレビ試験放送「Channel 4K」を開始した。CSデジタル放送を利用して配信され、NexTV-F加盟の放送局が制作した4K番組などを放送しており、10月には放送時間を拡大、2015年3月までに40本程度の番組が放送される予定となっている。12月に開かれたNexTV-Fとデジタル放送推進協会（Dpa）による「デジタル放送の日」の式典では、4K・8Kコンテンツの確保、国内外でのプロモーション、技術やコンテンツ制作上のノウハウや課題の共有化といった、普及へ向けた対応策が打ち出された。

放送後の番組をインターネットで配信するサービスの取り組みも進められている。日本テレビは1月から配信サービスを開始し、CM部分にオンエアとは別の動画広告を挿入するなどの形式がとられている。以前からあるテレビ動画配信のポータルサイトである、プレゼントキャスト社の「テレビドガッチ」と平行して、TBSテレビやフジテレビでも同様のサービスが開始された。

9月には、日本民間放送連盟の井上弘会長が、在京キー5局でインターネットによるCM付きの見逃し視聴サービスの検討を行うことを発表した。出演者などの権利処理の問題や、リアルタイム視聴への影響、地域ネットワークモデルとの競合など、様々な課題が指摘される一方、共同プラットフォームによる放送の価値の拡大に向けた新たな模索の動きは、注目に値する。

他方、12月には、キー5局と電通が共同で運営してきたビデオオンデマンドサービス「もっとTV」が、2015年3月をもって終了すると発表された。専用の受像機だけでなくスマホなどでの視聴も可能となっていたが、対応する機種が限られていることなどが普及を妨げたものと思われる。新たな視聴・配信プラットフォームが定着・普及する過程での、試行錯誤の1つの形であったとい

*かたの としひこ 一般社団法人日本民間放送連盟 番組部

えよう。

なお、キー5局とNHKは、テレビ関連情報や番組表などを網羅したアプリ「ハミテレ」を共同開発し、3月にリリースしている。番組連動企画や各局のおすすめ番組、全国の番組表、ネット上のテレビ関連記事など、様々な情報が搭載されており、テレビ視聴をデジタルツールで支援・促進する試みの1つとなっている。

◆ラジオの動向

2010年から運用されているラジオのネット配信サービス「radiko」は、当初、放送エリアに応じたエリア制限がかけられていたが、2014年4月に全国の加盟ラジオ局が聴き放題となる有料サービス「radiko.jp プレミアム」が開始された。radiko自体の月間のユニークユーザー数は2012年6月に1000万人を突破していたが、プレミアム登録者数は、7月の時点で10万人を越えるまでになった。

6月20日の午前8時台には、radiko全体の瞬間アクセス数が16万超と過去最高を記録した。同時間帯に、ラジオでワールドカップの日本対ギリシャ戦が放送されており、通勤通学の移動中に多数のユーザーが、スマホなどを通じて聴取をしていた実態が伺える。

放送本体では、TBSラジオ & コミュニケーションズ、文化放送、ニッポン放送のAM3社が9月に、FM補完中継局の予備免許を取得した。2015年の春から、災害対策や難視聴対策を目的としたFMでの放送が可能になる。FM補完中継局は、AM放送の放送区域で、FM放送用周波数を用いて補完的放送を行なうもので、東京スカイツリーのアンテナを3局共同で使用。放送内容は、AM放送と同内容となる。これは、その後の南海放送、北日本放送、南日本放送、秋田放送などでの同様の動きの先行事例となった。

◆スポーツ、視聴率

2014年のテレビ番組の視聴率をみると、やはり安定して高い数字を記録するスポーツ関連が上位に並ぶ結果となった。1~3位は、6月に開催された2014FIFAワールドカップのブラジル大会のいずれも日本戦が占め、コートジボワール戦46.6%、コロンビア戦37.4%、ギリシャ戦33.6%だった（関東地区）。ただし、時差の関係で放送時間が早朝になるなど、かつてのような驚異的な数字には繋がりにくかったようだ。また、上位には、新年恒例の箱根駅伝も、往路26.8%、復路27.0%と2日間にわたってランクインしている。

この他、2月にはロシアのソチで冬季オリンピックが開催され、スノーボードやスキージャンプなどで日本人選手がメダルを獲得した。羽生結弦選手が日本人で初めて金メダルを獲得したフィギュアスケート男子は、放送が深夜となったが、期待感もあり16.6%の高視聴率だった。

スポーツと放送に関する話題といえば、テニスの錦織圭選手の活躍も外せないだろう。全米オープンでの決勝戦はWOWOWの独占生中継であったが、WOWOWへの加入申し込みが殺到したのみならず、録画した試合の様相をNHKが同日中に急遽放送することになるなど、異例のフィーバーぶりをみせた。

通常の番組でいえば、放送終了が2013年中に予告されていたフジテレビの長寿番組『笑っていいとも!』。安倍総理の出演も話題となったが、3月末、30年を越える歴史に幕を下ろした。最終回の昼の放送は16.3%、同日夜に放送されたグランドフィナーレと題した特別番組は豪華ゲストを多数擁し、28.1%と高記録を残した。ドラマでは、SMAPの木村拓哉主演のフジテレビ系『HERO』が13年ぶりに復活し、初回が26.5%と期待に見合った数字となった。これが2014年のドラマで最高となるかと思われたが、12月18日放送のテレビ朝日系『ドクターX』が27.4%を獲得、年末になって1位に躍り出た。NHKの朝の連続テレビ小説も順調に推移し、『ごちそうさん』『花子とアン』『マッサン』などがコンスタントに話題となっている。なお、年間の各局の視聴率競争では、日本テレビが2011年以来となる三冠王（全日、ゴールデン、プライム）を達成した。

◆公権力と放送

2014年は、いくつかの点から、公権力とテレビ、放送、ジャーナリズムのあり方が問われた年でもあった。例えばNHKでは、1月に就任した舛井勝人会長の、特定秘密保護法や従軍慰安婦問題についての会見での発言や、その後の衆議院総務委員会などでの答弁、さらには、百田尚樹、長谷川三千子の両経営委員の言動に対し、「政権からの自立と真逆」などとして、NHKのOBらが罷免を求める行動を起こすなどした。

年末には、2012年以来の衆院選が行われた。自民党が在京キー5局に報道の「公正中立」を求める文書を渡していたことが明らかになり、メディアに対する安倍政権の姿勢とともに、権力に対峙する報道機関の胆力も問われることとなった。2013年に成立した特定秘密保護法は、取材・報道に関わる懸念を大いに喚起したが、12月に施行され、今後の運用に注目が集まっている。

公権力からの介入に対する放送界の防波堤ともいえるべきBPO（放送倫理・番組向上機構）は、放送と人権等権利に関する委員会が6月に顔なしインタビュー等についての要望を公表した。「安易な顔なし・ボカシ映像が流されていないか」「事実の正確性の担保のため、顔出しを原則に」などとの指摘は、報道のあるべき姿にまつわる議論を呼んだ。